

大宮姫神社の建築について

宮 本 達 夫

Style of “Ohmiyahime-Jinja”

Tatsuo Miyamoto

I はじめに

大宮姫神社は佐世保市の中心部から約5 kmほど北西に離れた竹辺地区に建つ、ごく小規模な神社である(写真-1)。長崎県の神社建築に対し昭和60(1985)年度に文化庁の指導と補助により長崎県近世社寺緊急調査が実施され、その結果が報告書として刊行されている(長崎県文化財調査報告書第79集「長崎県の近世社寺建築—近世社寺建築緊急調査報告書」昭和61年3月、長崎県教育委員会)。それによれば、長崎県は対馬と壱岐を除くと古代・中世の建築遺構がなく、近世以降のものが中心となっている。その内、最も古いものは壱岐の天手長男神社本殿で、その建設年代は元禄2(1689)年である。また長崎県には神社そのものの棟数が少ない。さらに一部を除くと、小規模な流造本殿が多く、一般的に長崎県の神社の規模が小さいことが報告されている。

大宮姫神社は上記の昭和60年の調査時には対象とならなかった。しかし、かなり古い部材が使用されており、かつ部材に施された装飾も江戸期の特徴を示していることから、少なくとも建設年代を考察するに値する神社であろうと思われる。

大宮姫神社は地元の人々の信仰の対象として親しまれ、現在まで保存されて来たが、建物の痛みが大きく建替えの必要が生じて来た。そのため神社の建築的価値を判定するため、神社本殿の平面構成、部材の装飾及び建設年代について検討を加えるため二度にわたって調査を行った。第一回目は1994年7月18日で、主として建設年代を判定するため神社に保存されている棟札の調査を行い、併せてそれらの写真撮影を行った。第二回目は1995年12月21日～22日にかけて平面図の作成を行うことと年代判定をより厳密に行うために平面の実測調査と部材装飾の調査を行った。尚、第一回目の調査後に簡単なレポートを地元へ提出したが、本論はそれに第二回目の調査結果を加筆したものである。

II 建築概要

大宮姫神社は国道204号線から少し南側に入った小高い丘陵上にある。境内の入口には「大

宮姫神社」の扁額を掲げた小さな台輪鳥居があり（写真－2）、その背後にある12段の石段を上ると、拝殿前に到る。拝殿は痛みが大きかったため平成7（1995）年に取り壊された後、同規模に再建されたものである。本殿は拝殿の後方に接して建つ。拝殿及び本殿は南西方向に向いて建っている。

構造形式は桁行3間、梁間2間で、前方に1間の向拝が付いた三間社流造である。屋根は切妻造で現状では大棟を有し、棟の両端部に鬼瓦を載せているが、それを含めて全体を銅板で覆っている。銅板下の調査を行っていないので不確かであるが、当初は桧皮葺あるいは柿葺であったと思われる。現状では棟上に千木及び鏝木はない。また破風には懸魚があるため、屋根の意匠は仏寺風である。

妻側は梁の上に板蛙股を置いて虹梁を支え、さらにその上に太瓶束を載せ、それで棟を支えている（写真－3）。平側の柱上に平三斗を載せ、桁を支えている。軒は一軒で繁垂木である。

主要部分の柱は丸柱が使われ、海老虹梁を受ける向拝柱だけが角柱である。丸柱の頂部は水平に切られ、粽はなく、直接大斗を載せている。内陣と外陣を構成する板壁の厚さは12mmで、丸柱に納入がなされている（写真－4）。

内陣と外陣の周囲に高欄付の切目縁を回している。正面に登高欄付きの6段の階があるが、浜床及び浜縁はない（写真－5）。本殿の周囲には擬宝珠高欄付きの切目縁を回す。その幅は切目長押から縁先端までが526mm（1.74尺）である（写真－6）。

柱間装置として外陣前面の中央部は両開きの格子戸で、その両側は2間ともはめ殺しの格子、外陣と内陣の間の3間は両開き板戸である。その他の3面の壁は上述した厚さ12mmの板壁である。

外陣の床は梁間方向に張っているのに対し、内陣の床は桁行方向に張っている。天井は外陣、内陣ともに棹縁天井で棹が桁行方向へ通っている。

向拝柱、外陣の丸柱、登高欄等には丹塗が施されているが、外陣と内陣の内部は組物、壁ともに素木のままである。また内陣の板戸の表側には白龍の絵が描かれ、その地の部分も白色に塗られている（写真－7）。

本殿全体は整形した御影石の基壇の上に載り、縁束が載る基礎石は整形した砂岩、本体の丸柱が載る基礎石は角に丸みを帯びた自然石を用いている。亀腹はない。それぞれの縁束と丸柱は貫によって足固めがなされている。

III 平面構成（平面図参照）

上述したように本殿は桁行3間、梁間2間の三間社流造である。規模は小さく、梁間×桁行は3,189mm×2,016mm（10.52尺×6.65尺）である。柱間寸法は梁間方向については2間とも1,008mm（3.33尺）である。桁行方向は中央だけが1,173mm（3.87尺）で、その両側は側面の

柱間寸法と同じく1,008mm (3.33尺) である。これらの寸法は尺寸体系 (303mm) できれいに割り切れない。同様に切目長押の長さあるいは縁の幅等も尺寸体系に当てはまらない。しかし、畳の基準寸法の一つである京間の1間は通常6.65尺 (2,015mm) であるから、本殿の桁行方向、梁間方向に対して使われている1,008mm (3.33尺) はその半分である。また桁行方向の中央部分 (1,173mm) の柱間に対してだけ165mm (約0.5尺) だけ大きくしたとすれば、この本殿は京間の1間を基準として設計されたと考えられる。つまり本殿に京間の畳を3枚並べた大きさということになる。中央部分だけを大きくした理由は主神を祭る場所だからであろう。

内部は外陣と内陣とに分かれ、それらは同形同大である。外陣前面は中央に両開きの格子戸が付き、両側ははめ殺しの格子が入っている。その奥に内陣があるが、3間とも同大の両開きの板戸が入っていることから、それぞれに神様を祭っていたと考えられる。後述するように、明和7年 (1770) の棟札には奉納される側の神名として「○月不合尊」、「大宮賣尊」、「豊玉姫尊」の三神の名前が記載されているが、これらの神様達を祭っていた可能性がある。

IV 構成部材

部材の古さを外見から調査した結果、次の部材群が当初のものである可能性が高い。まず長押より上で、かつ垂木より下にある部材群、つまり虹梁、太瓶束、蛙股及び太瓶束の両脇に見える彫刻等である。次ぎに外陣の前面にある丸柱3本、また擬宝珠柱を含む回縁を構成する部材群、さらに登高欄を含む階も古い材料である。他にも外観からは分からない当初からの部材があると思われるが、今後行われるであろう解体修理工事の段階で再調査すれば、それらを確認出来ると思われる。

これらの内、建設年代を考察するために装飾の様式に注目したいのは妻側の虹梁、蛙股、彫刻及び木鼻、さらに本体の丸柱と向拝を結んでいる海老虹梁に施された装飾である。まず妻側の虹梁の両端部を観察すると(写真-3、8)、そこに施された渦と若葉から構成される絵様は通常の渦とは異なり、上側から下に向かって巻いている。若葉は通常通り下から上へ向かって曲線を描いている。この点は残念ながら説明出来ない。今後とも調査を進めたいと思う。それはさておき、この虹梁に施された装飾について時代的特徴をまとめると次のようになる。まず江戸時代初期の特徴として渦に木瓜が見られず、きれいな曲線であることが挙げられる。一方、江戸時代前期以降の特徴として線刻の彫りが深くて広いことや鎬が見られること。さらに若葉の形態が長く伸びやかであることが挙げられる。よってこの虹梁の装飾は江戸時代初期と前期の特徴を併せ持っているため、それらの時期の丁度過渡期の様式を示していると思われる。付け加えるならば、渦や若葉に玉、花が付加される江戸時代中期以降の特徴は見られないことから時代はそれ以降下ることはない。次に向拝柱と本体の柱を繋ぐ海老虹梁であるが、同様に検討すると、木瓜、鎬及び若葉が見られないことや彫りが若干浅いこと等、全てにわたって江戸時代初期の特徴が認められる(写真-9)。また木鼻に施され

た線刻は渦の巻が浅く、その形は円形に近く、また柱からの出が少ないことが分かる。これらも江戸時代初期の様式である(写真-10)。蛙股も単純な板蛙股を用い、装飾が少なく古い形式を有している(写真-3)。太瓶束の両側にある彫刻は木鼻と同様に古い手法である線刻が用いられている(写真-3)。以上のように古い部材に施された装飾様式を検討すると、江戸時代初期から前期にかけての特徴を示していることが分かった。

V 現存する棟札(写真-11及び【棟札①】、【棟札②】、【棟札③】参照)

建設年代を判定するのに有効な棟札が9枚保存されており、それらに記載された年号と記載された内容は下記の通りである(写真-11)。

【棟札①】 延宝7年(1679)	上棟の件
【棟札②】 享保17年(1732) 3月吉日	屋根替の件
【棟札③】 明和7年(1770)	修復の件
【棟札④】 明治15年(1882) 10月12日	屋根替の件
【棟札⑤】 明治26年(1893) 5月18日	寄付者名と金額の件
【棟札⑥】 明治26年(1893) 5月18日	神殿修繕と拝殿新築の件
【棟札⑦】 昭和3年(1928) 4月17日	社務所新築の件
【棟札⑧】 昭和9年(1934) 10月2日	銅板屋根替の件
【棟札⑨】 昭和40年(1955) 10月3日	石造記念碑新築の件(紀元2625年記念)

建設年代を考察するために9枚の棟札の内、江戸時代の年号が記載された3枚について検討を加える。棟札はいずれも表側に奉納する相手側の神名、祭神名、祈願文、棟札を奉納する契機となる工事内容を記した主文、年号及び奉納者名(公人)が記載され、裏側には関係した庄屋、大工等の民間人の奉納者名及び祈願文が記載されている。

最も古い年号である延寶7(1679)年が記載された【棟札①】は137mm×1,060mmの大きさで、その表側には奉納される側の神名である「豊玉姫尊」の文字が円で囲まれ、その真下に右から左へ「上棟」の文字が記載されている。主文には「○(奉という字と思われる)建立大宮大明神御寶殿一字」と記載されている。さらに主文の両脇に「国家安全」、「御武運永久」、「○當所安穩」、「田畠成就楽」等の祈願文、年号及び奉納者名が記載されている。裏側の下半分には近在の6人の庄屋の名前と大工の名前及び小工の人数が記載されている。上半分には墨が消えており、何が書かれているか不明であるが、他の棟札がそうであるように何等かの祈願文が記載されていた可能性もある。

次に古い年代を示す【棟札②】は133mm×543mmの大きさで、享保17(1732)年三月吉日の記載があり、【棟札①】の年代から54年後のものである。奉納される側の神名はなく、代わ

りに方位を示すと思われる文字が8つ円の中に記載されている。その下に「奉再建大宮大明神屋祢替宝殿一字」という主文、さらに当時の太守である「松浦肥前之守」という文字、郡代の名前、代官の名前、庄屋の名前等、奉納者名及び「天下太平国土安全」、「御武運永久」といった祈願文が記載されている。裏側は墨が消えかかって分かりにくいですが、16文字からなる一行の文がある。その中の文字には「安全」、「五穀」、「成就」等の文字が見えることからこれも祈願文であると思われる。

【棟札③】は129mm×765mmの大きさである。その年代は明和7（1770）年で、【棟札②】の年代からさらに39年後のことであり、【棟札①】の年代からは93年後のことである。一番上に「○月不合尊」、「大宮賣尊」、「豊玉姫尊」の奉納される側の三神名が円で囲まれ、その真下に「奉再建大宮大明神寶殿修覆」という主文、その右側に年代、左側に「六月廿四日」の文字が記載されている。また主文の下には奉納者名である「太守松浦肥前守源誠信公」の文字が記載されている。裏側には「三元三行三妙加治」という祈願文と近在の庄屋6名の名前及び大工の名前が記載されている。

これらの記載内容の中で創建年代を考察するために特に注目したいのは棟札に記載された主文の内容である。各主文の内容は「奉」という文字の下に順に①建立又は再建を区別する文字、②祭神名、③対象となる建築物名、④工事の内容、⑤棟数が記載されている。あらためて江戸時代の年号を有する棟札の主文の内容を並べると次のようになる。

【棟札①】 ○（奉？）建立大宮大明神御寶殿一字

【棟札②】 奉再建大宮大明神屋祢替宝殿一字

【棟札③】 奉再建大宮大明神寶殿修覆

【棟札①】では奉納される側の神が豊玉姫尊であるから、「大宮大明神を祭った宝殿1棟を建立し」、それを豊玉姫尊に奉納するという意味である。【棟札②】は奉納される神名がないが、「大宮大明神を祭った宝殿1棟に対して屋根の葺き替え工事を行った」と解される。【棟札③】は「○月不合尊」、「大宮賣尊」、「豊玉姫尊」に対して「大宮大明神を祭った宝殿を修復」して奉納するという内容である。

これらの中で【棟札①】だけに「建立」という文字が使われていることから、明らかに【棟札①】の年代つまり延寶7（1679）年にこの神社が建てられたことが分かる。また他の2枚にはいずれも「再建」と記載されていることから、何等かの工事が行われたと考えられる。その内容は【棟札②】では屋根の葺き替え工事であるし、【棟札③】では全体的な修復工事だったと考えられる。上述したように棟札①と棟札②の間には54年の開きがあり、棟札①と棟札③の間には93年もの開きがある。木造建築の耐久性を考慮すると、屋根の葺き替え工事と全体的な修復工事のいずれも創建当時からは年代が開き過ぎていると考えられる。しかし、棟札

を奉納するほどの大きな工事がそれぞれの年代に行われたのであって、小規模の工事はその間にもなされていたと考えれば、それも納得できよう。蛇足ながら「寶殿」あるいは「宝殿」は神社本殿の古称でもあるので、これらの3つの主文は本論で扱っている大宮姫神社本殿そのものと考えて差し支えない。

VI 祭 神

現存する江戸時代の年号が記載された3枚の棟札ともその主文には「大宮大明神」を本殿に祭っていることが記載されているため、この神を祭神としていることは間違いない。また棟札の記載形式を見ると、大宮大明神を祭った神社本殿を棟札の一番上に記載された神々に奉納したと理解できる。ここで問題としたいのは内陣の扉が三つあることから三神を祭っていた可能性が高いということであり、そこにはどのような神様を祭っていたかということである。

【棟札①】では「豊玉姫尊」が奉納される側の神であり、【棟札③】では奉納される側の神が「〇月不合尊」、「大宮賣尊」、「豊玉姫尊」の三神である。本来「大宮姫尊」は宮廷の守護神として崇められている神であり、「豊玉姫尊」は海神である豊玉彦の娘で、鵜草葺不合(うがやふきあえず)命を生んだとされる神である。一番右側に記載されている「〇月不合尊」は最初の一文字が不明であるが、この中の「不合尊」の三文字が豊玉姫尊が生んだとされる鵜草葺不合命の最後の三文字に一致することから不確かではあるが、この神のことであろうと考えられる。このように【棟札③】では「大宮姫尊」を含めた三神を奉納される側の神としてではあるがはっきりと棟札に記載されている。また他の棟札にそれら以外の神名が見当たらないことから【棟札③】を奉納した時代にはこれら三神を内陣に祭っていたと考えられる。しかし大宮姫尊を祭った本殿を同じ神に奉納することには若干の疑問が残るし、これら三神の関係も不明確である等これらの論拠は未解決の点が多々あるという指摘がなされると思う。よって現段階ではこれら三神を祭った可能性を指摘するに留めておき、今後さらにこれらの疑問点について研究を進めたい。

VII 建設年代

大宮姫神社本殿の建設年代を考えるに当たって部材の装飾様式と現存する棟札の内容を検討した。虹梁、木鼻、蛙股及び彫刻等の絵様は江戸時代初期と前期の特徴が認められる。また棟札に記載された内容を検討すると、当本殿は当初、延宝7年(1679)に建設され、享保17年(1732)の屋根替えを経て、明和7年(1770)に修復されたと考えて差し支えない。このことを確かだとすれば、上述した長崎県で最も古いとされる壱岐の天手長男神社本殿の建設年代である元禄2(1689)年よりも10年ほど古いことになる。

VIII ま と め

以上の内容をまとめると次のようになる。

- ①平面の設計単位は京間の単位、つまり6.65尺で設計された可能性があることが分かった。
- ②本神社の名称は大宮姫神社であり、かつその祭神は大宮姫尊であることは棟札の記載内容から明らかである。しかし、内陣の前面に同様の扉が三ヶ所有すること、及び明和7年の年号が記載された棟札に奉納される側の名前であるにせよ、三神名が記載されていることから神社の呼称は「大宮姫神社」であるが、明和7年の段階で三神を祭っていたと推測される。
- ③大宮姫神社の建設年代はその装飾様式と棟札の記載内容から判断して江戸時代前期の延宝7年（1679）であり、この年代は長崎県で最も古いとされる壱岐の天手長男神社本殿の建設年代である元禄2（1689）年よりも10年ほど古く、重要な建築遺構である。

最後に当本殿についての建築的価値に関する所見を述べる。まず第一に重要なことは佐世保近辺に近世の社寺遺構が少ない中であって、当本殿は装飾的に見て江戸時代初期と前期の特徴を有し、その建設年代がこれまで長崎県で最も古いとされている壱岐の天手長男神社本殿よりも古い可能性があり、大変貴重な遺構といえる。第二に大宮姫神社に一連の棟札が保存されており、当本殿の建設年代や修理・修復及び再建の経緯がある程度明らかにしうることも貴重なことである。第三に神社の保存に対して地元の人々の大きな熱意があることも重要である。以上の点から現在の調査段階でいえば、江戸時代前期におけるこの地方の神社建築の遺構として建築学的にも重要であると考えられる。よって当本殿を当初の形態に修復し、今後とも保存していく価値が十分にあると思われる。



(写真-1) 「大宮姫神社」外観



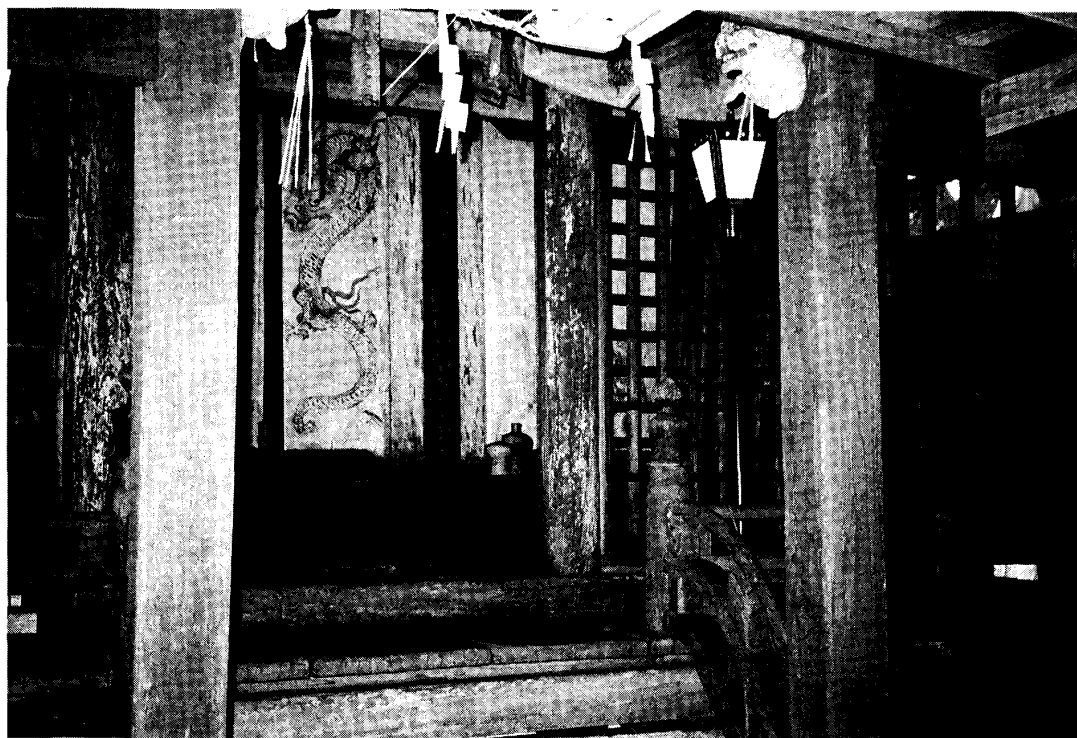
(写真-2) 台輪鳥居



(写真-3) 蛙股・虹梁・太瓶束



(写真-4) 丸柱と組物



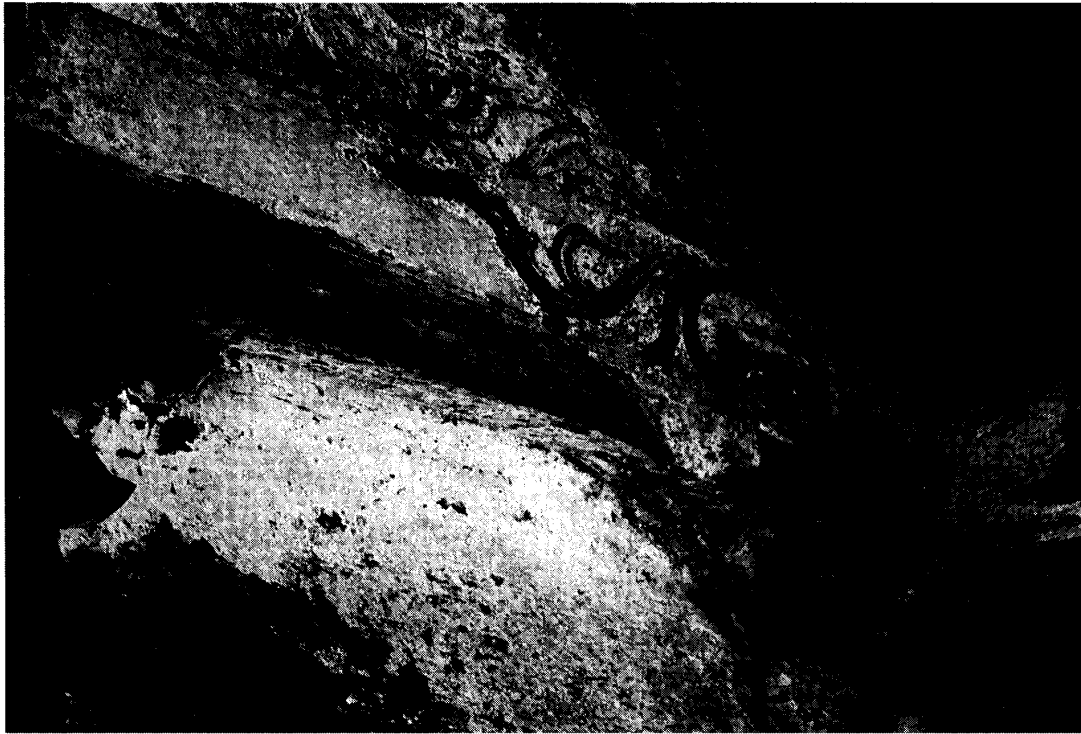
(写真-5) 登高欄付き階



(写真-6) 高欄付き切目縁



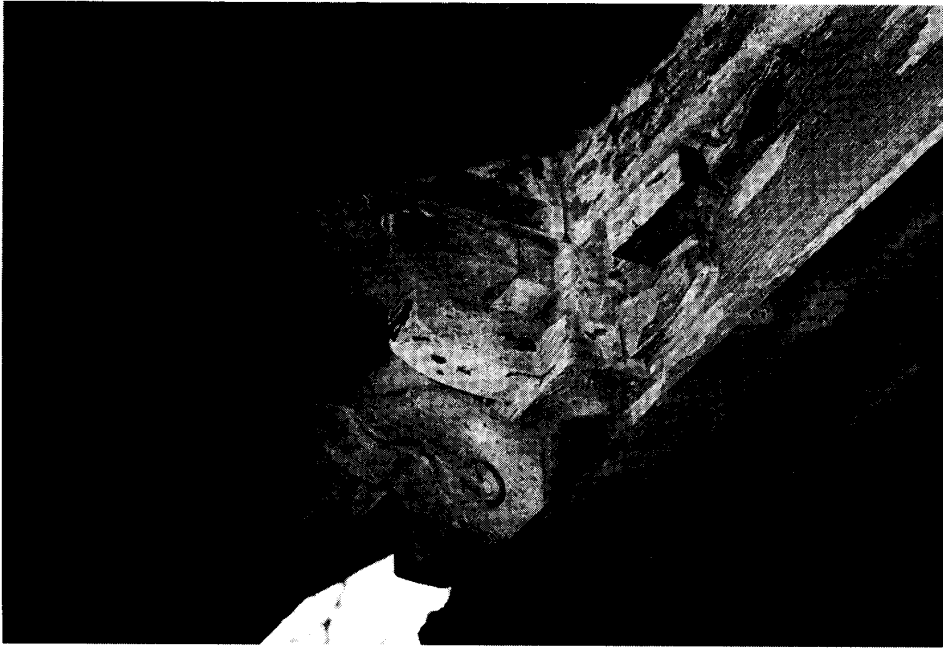
(写真-7) 内陣の板扉



(写真-8) 虹梁詳細



(写真-9) 海老虹梁



(写真-10) 隅部の組物と木鼻

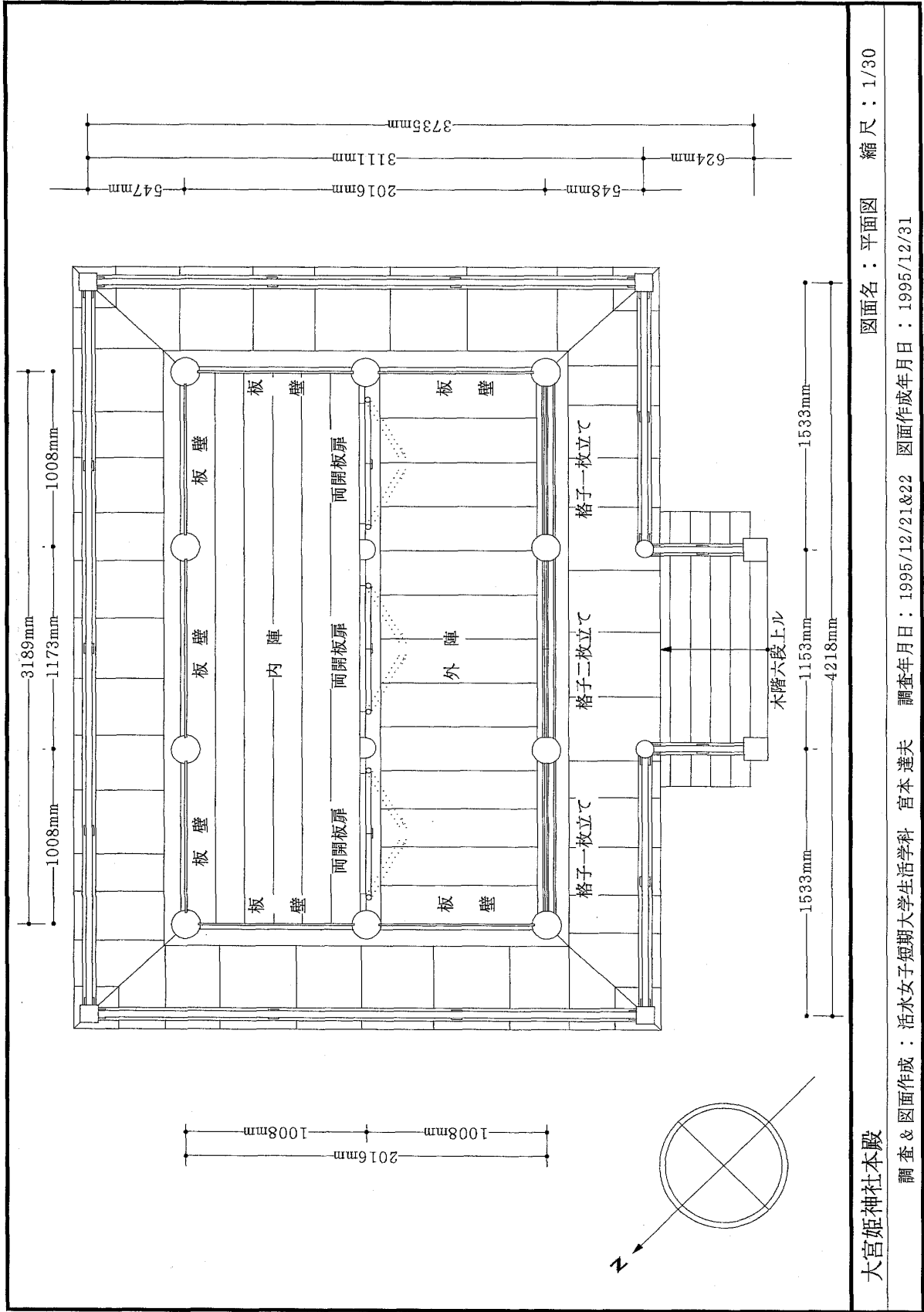


(写真-11) 江戸時代の年号を有する棟札

右から【棟札①】延宝7年(1679)

【棟札②】享保17年(1732)

【棟札③】明和7年(1770)



【棟札①】 大きき一三七×一〇六〇ミリ

(表側)



豊玉姫尊

上 波羅伊五意
棟 吐普加身依美多女
喜餘目出■

国家安全 御武運永久 御子孫繁昌 御願圓滿
■(奉?)建立大宮大明神御寶殿一宇 大檀那松浦肥前■
■當所安穩 田畠成就樂 常磐堅磐仁 守護幸給

本願 山口又兵衛

この部分
木が腐食
しており
解説不可
能

旨延寶七 己
未 天

この部分
木が腐食
しており
解説不可
能

祠官 堤勘大丈

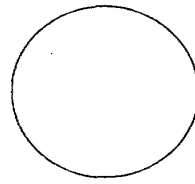
(裏側)

中里村 中尾喜左衛門
池野村 牟田楠左衛門 大工 土肥藤内
庄屋中 貝瀬村 岩崎又左衛門
大野村 吉田次兵衛 小工 以上八人
柚木村 久原功左衛門
新田 次■衛門

■印の文字は解説不可能である文字を示している

【棟札②】 大きさ一三三×五四二ミリ

(表側)



享保一七壬子天三月吉日 當國之太守
奉再建大宮大明神屋祢替宝殿一字 御武運永久
天下太平国土安全 松浦肥前之守

郡代 廣瀬瀧右衛門
代官 筒井勇助
祠官 ■本伊織
庄屋 ■野友助
細 ■力武喜右衛門
屋祢屋 安武太三次

(裏側)

■靈神道加持 ■中安全五穀成就

■印の文字は解読不可能である文字を示している

【棟札③】 大きき一二九×七六五ミリ

(表側)

郡代 葉山助之進
 祠官 松本備後榮正
 代官 久保作佐衛門
 同 堀新次兵衛

奉再建大宮大明神寶殿修履 太守松浦肥前守源誠信公

明和七 寅年 庚
 六月廿四日

月不合尊
 大宮賣尊
 豊玉姫尊

■印の文字は解読不可能である文字を示している

(裏側)

三元三行三妙加治

庄屋 末永永儀左衛門
 中里 大石利右衛門
 皆瀬 江口儀右衛門
 大野 馬渡林左衛門
 柚木 田代吉兵衛

新田 山口野 ■衛門
 大工 木山並助